

雲南省紅河ハニ族の年中儀礼

楊 六金[※]

ハニ族は我が国西南の辺境に住む、長い歴史をもった山地農耕民族である。人口は1,253,952人（1990年末の統計による）

であり、紅河州、思茅地区、西双版纳州、玉溪地区、楚雄州、昆明市等六地域の二十数県に分布している。

以前はハニ族の自称、他称は三十余りもあった。解放（1949年）以後は、本民族の意志に基づき、比較的人数の多い自称「ハニ（哈尼）」を本民族の統一名称とした。

ハニ族は長い歴史的過程において、不断に物質的財産を築き、自らの発展を求めると同時に独特の風俗習慣を形作っていった。当初、各地のハニ族の言語および風俗習慣は比較的一致していた。後に様々な原因と、居住地域の分散、政治、経済、文化の発展段階の不均衡により同じでないところが生まれた。以下で、筆者は紅河州楽育郷然仁、妥色一帯の「ハニ支系」の習俗と祭祀を紹介する。

一 月

1 ピュニユフシ（Pyulniul huvqsilvq）：春節

ピュニユとは漢族を示す。フシは新年のことである。つまり、「漢族新年」という意味である。

紅河南岸に住むハニ族はピュニユフシを祝い、漢族の「春節」と同じく祝う。農曆一月の一日に正月を始め、期間は一日である。前年の最後の三十日の晩をハニ族はフユ（huvqyul）といい、「昨年」という意味である。前年の最後の日の朝は餅をつき、午後には村をあげて豚を一頭殺し、各戸に1キロ程度に分ける。裕福な家では雄鶏を殺し、祖先に供える。それは「前年」を送り出し、「新年」を迎えることを表している。正月の朝は、酒や肉、湯圓、米飯などを祖先に供え、この日は普通、客を招かず、比較的簡単に済ませる。

2 マウジウ（Maqwuvsilwuv）：悪霊を払う

マウジウというのは悪い霊を防ぐという意味である。毎年一月の最初の猿の日⁽¹⁾あるいは龍の日に、一日間祝う。祝う場所は村外れの道路の上である。供え物は白い雄鶏と九振りの木刀であり、木刀には十五個の鋸状の歯が付けられており、そこには鶏の血が付けられている。司祭は呪文を唱えながら木刀を村の入り口に挿し、それは悪い霊が村に入らないということを示す。祭祀が終わると、村の長老と司祭は祭祀を行なった場所で共食をする。

※中国雲南省紅河民族研究所

3 ロツォツォ (Lolcoqcoq) : 獣神への祭祀

ロツォツォとは獣神への祭祀という意味である。毎年農暦一月の最初の猿の日あるいは虎の日に行い、一日間挙行する。

昔はハニ族の村落はみな森林に取り巻かれていた。村のなかで飼育していた家畜が虎や豹に出くわすことも多く、見えない魔物を崇めるという幼稚で蒙昧なアニミスティックな観念により、毎年農暦一月の初めの猿の日か虎の日ロツォツォを行なった。村の外の右の端で赤い雄鶏（一対の卵でもよい）を殺し、司祭の神秘的な呪文が野外の獣神に響いた。儀礼が終わると、村内の幾人かの長老と司祭が儀礼の場所で会食する。それに伴って、鶏の脚や頭を道の下に埋め、獣神を鎮める。

4 ミツァツァ (Miqcaoqcaoq) : 風神、火神への祭祀

ミ(miq)とは火のことであり、ツァツァ (caoqcaoq) とは風のことであり。つまり、風と火の神を祀るという意味になる。毎年農暦一月の二度目の鼠の日に行い、期間は一日である。儀礼を行なう場所は村の外の左側である。儀礼に使うのは一匹の山羊と一対のつがいの鶏である。祭祀が終わると山羊の脚を折って、水路の近くに埋める。その他は村の各家からひとりずつ呼んで、儀礼の場所で儀礼の執行人と共に共食する。

言伝によると、たいへん昔、人と獣がまだ分かれていなかったころ、一匹の猿がハニ族のところへ来て火をもっていった。その日は鼠の日で、大風が吹いていた。猿が村から火を持っていったとき、火種を路傍の草の上に落としてしまい、それが燃え上がってハニ族の家は焼失してしまった。そのため、ハニ族は農暦一月の最初の鼠の日を不吉と思うようになった。その後、紅河南岸のハニ族はその日は老若男女みな家に居て、その日を過ごし、風が吹かぬように、火の神が村に入って火災を起こさぬように願うのである。

二 月

1 ハラミノニロ (haqlaq milsaol nee'lao) : 虎の日に祀る村基の日

ハラとは虎のことで、ミノとは村基のことであり、ニロは祭日を表す。つまり、虎の日の村基の祭祀という意味になる。毎年農暦二月の最初の虎の日が新しい村基を定める日であり、各地のハニ族ではその日は違うものの、祭祀はほぼ一致している。

以前、紅河の然仁一帯のハニ族は自分の生活空間（耕地、牧場、山林を含む）が混雑してきたと感じると、耕作、梯田の開墾、放牧、薪の伐採、村の移動のためまず、最も重要なことは村基を定めることと村の神の樹を定めることであった。

村基を定める方法はまず、村長が新村を造る所に行き、三度頭を地面につけて礼をした後、恭しく三粒の穀物の種を播き、さらにヘシ (helsiq : 海の貝、つまり古代の貨幣) を三個播き、地の神の礼物としてそれらを捧げ、鶏の骨を埋める。三日後にその地の変化を見にいき、穀物が発芽しているか、貝が潰れてないか、鶏の骨が変色していないかをみて、もしそうでなければ、そこ

が吉祥の地であり、そこに村基を造る。

村基を定めたのち、村神樹を定める。村神樹は村基の右側の樹か村基の上の方の山の上にあり、青々とした林から選びだし、その木々をプマアボ（Puvma albol）と呼ぶ。その木々のなかから一本の樹を選びそれを村神の化身とし、樹の元は石か竹垣で囲い、豚や犬が小便をしないようにしておいて、さらに一つの石をおいて祭壇とする。

言伝えるところ、昔はハニ族は村基を選ぶ日を農曆二月最初の虎の日にしており、ハニ族は虎の日を村基を選ぶ吉日としていた。そのため、紅河南岸のハニ族は毎年農曆二月の最初の虎の日を祭日としている。

2 ヨノモミニユニユ（Yolnao molmil nee'lao）：羊の日の天神の祭祀

ヨノとは羊の日のことで、モミは天神、ニユは祭日のことであり、つまり羊の日の天神の祭祀ということになる。天神の祭祀は毎年農曆二月の二度目の羊の日に挙行され、一日間の祭りである。古代においてハニ族の生産力は非常に低く、万物に靈魂が宿るという観念を持っていた。天神が人の命と野外の作物を守ってくれないと、地上の人間は生きていけないと考えていた。そのため、人が天神を祭祀しないと、天神は地上の人と作物に災害をもたらすと考えていた。祭祀の期間は老若男女一律に労働に行かず、そうでないと天神が罰を下すと考えていた。

3 ホニヨニヨシヨシ（Haoqniaoq niaoqsill siil）：色のついたおこわ

ニヨはもち米のご飯のことであり、シヨシとは染めることである。つまり、染められたもち米のご飯という意味である。毎年農曆の二月、太陽鳥をビグアマ（biguaqma）といい、村の付近の森を忙しく飛び回る。それは大地に春が来たことを意味する。ハニ族は太陽鳥が早春の報せを運んでくると思っていて、田を耕し、穀物の種を播くころ各家で吉日を選んで、黄色いおこわを太陽鳥に捧げる。祭祀が終わると、香のよいおこわを隣の人に一碗あげて、太陽鳥が啼いて、あなたの家も種蒔きをするころになったと報せてあげる。

三 月

1 ルボロ（Luqbaol lol）：清明節

ルボとは墳墓のことで、ロとは祭祀のことである。つまり、墳墓を祀るということである。ルボロは農曆三月、漢族の清明節と同じときに行なう。人々は死者に深い感慨を抱き、あの世にいった親戚を祀り、各リニジの者は祠に集まり、団圓飯を食す。その場を借りてリニジの団結を強める。

伝え聞くと、清明節の前後三日間は墳墓の門が開き、子孫が祀った供物を祖先たちは食べることができる。そのため、清明節はすべて新鮮なおかずを墳墓に祀る。それは子孫が持ってきた新鮮なおかずを祖先に祀り、今後祖先はあの世から子孫を見守るということを表している。

2 ソラニヨシヨシ (Saoqla haoqniaoq niaoqsiiq siiq) : 三月の色のついたおこわ

ソラは三月であり、ニヨはもち米、シヨシは染めるということである。つまり、三月の色のついたおこわという意味である。ハニ族はカッコウを崇拜し、フブアマ (hulbu aqma) と呼んでいる。毎年、山で茶の花と桜の花が真っ盛りの三月の間、老若男女すべて最初にカッコウの声を聴いたらすぐ「見た」と報せなければならない。それは春が来たということである。彼らは「見た」の第一声を、働き者で善良なハニ族農民の五穀豊穡、六畜興旺、平安無事を保障するものとみなしているからである。伝え聞くところ、カッコウは天上のアボモミ (albolmolmi) ^[1] が遣わした、天の遠い洞窟から出てきたもので、スニボマ (Sulnil baoma) という大海を飛んでいる時、年老いたカッコウが飛べなくなり、海に落ちるのを恐れた。その時大海から龍の尾が出てきて、一本の樹になり、カッコウを休ませた。カッコウはアボモミの重責を感じ、万難を乗り越えて、春の報せを人間に報せた。そしてハニ族に春の耕作、夏の鋤いれ、秋の収穫、冬の貯蔵を教え、安寧な生活を送れるようにした。

伝統的な習俗にしたがって、多数の人々はカッコウの声を聞くと、よい日が約束されたように思う。各家ではおいしいおかずを用意し、樹の花で漬け込み炊いた黄色いおこわの他に、薬で染めた赤い卵を煮て作る。カッコウへの尊敬を表し、これらをソラニヨシヨシという。

3 モアナ (Moqhhaq naq) : 農具の神を祀る

モアナとは農具の神を祀ることである。毎年農暦三月の二度目の馬の日に一日行なう。ハニ族は多神を崇拜する農耕民族で、田には田の神、農具にも農具の神がいると信じている。各家では三月の二度目の馬の日にもちをつき、鶏を殺して農具を祀る。伝え聞くところ、農具の神を祀らないと農具を使ったときすぐ手足に怪我をするという。そのため、紅河南岸のハニ族は毎年三月の二度目の馬の日には農具の神を祀る。それはハニ族が農具を使うとき災難が起これぬようにするためである。

四 月

1 カシニロロ (kalsil nee'lao lao) : 穀物を祀る日

カシとは新しい穀物のことで、ニロロは祭りの日、つまり新しい穀物を祀る日ということになる。毎年農暦四月の鼠の日か羊の日に一日間祭りを行なう。

伝え聞くところ、たいへん昔、ハニ族の田の穀物がよく育ったある年、穀物に虫の害が起こった。人々は内心焦っていたが、この虫の害をなくす方法はなかった。その後村の山のリーダーが全村に、その日老若男女全員村から出て労働をすることを禁止し、害虫の駆除の相談をし、村から出て労働したものを罰することを通知した。全村で一昼夜相談したが、そのときに害虫がすべて死んでしまったことは知らなかった。その後ハニ族は毎年この日を祭りとし、期間内に村外に出て労働したものには罰金を課することにした。そしてこのことは今にいたっている。

2 シャヘヘ (Xalheiq hel) : 取水口の祭り

シャヘヘは田の取水口、ヘは祭祀のことで、田の取水口の祭りということになる。毎年農暦四月、田の苗がまさに発芽しようとするころ、家の吉日を選んで、一對の卵（鶏と家鴨の卵ひとつずつ）とおこわ等の品をもってきて自分の家の田の取水口に祀る。その目的は苗が無事に早く成長し、金色の穀物が河原の石のように実るようにということである。

五月

1 ニュラク (Niuq lal kul) : 牛の魂を呼ぶ

ニュラクとは牛の魂、クは招くという意味であり牛の魂を招くということになる。毎年四月、五月は一年で最も忙しい時期で、人々は五穀の種を播きおわり、穀物の種が育つころのは、牛が人を援けてくれるからだと思う。そのため一日間祭祀をし、牛に敬意を払う。村で行なうことはなく、各家で祭祀をし期間は一日である。着物を染める藍でおこわを染める。祭りの朝、その紫の液で牛の顔を洗ってあげる。それは牛の疲労をやわらげ、牛の精神を覚醒させる。

供物は一羽の雄鶏で、紫のおこわと鶏肉を祖先に供える。祭祀が終わったのち、鶏肉とおこわをスープに入れて牛に食べさせ、こうして牛はその年の春耕が終わったことを知るのである。

2 クチャチャ (Kuqzaqzaq) : 六月年

クは六のこと、チャチャは「食べる」あるいは祭祀をするということ、六月の祭りの意味である。毎年苗が育つ五月、六月の牛の日化虎の日に祭祀が始まる。ハニ族の伝統的な暦法にしたがって、一年一度のクチャチャを迎えるのである。クチャチャはハニ族の二大祭りのうちのひとつである（十月年、六月年）。クチャチャは五穀豊穡、人畜平安を祈る農閑期の娯楽である。

祭りの一日目は、各村で井戸を掃除し、山林から青い松の木を切ってきて、ブランコ場にブランコを建てる。二日目、祖先が足を休めることを象徴する籬の上に松の葉を散らし、各村で牛や豚を殺し、肉を均分に分けて持ち帰り煮る。井戸の水を入れて祖先たちに献ずる。献ずる最初の一碗の米飯と酒（適量の肴）はリニジのなかで最も年をとった長老に捧げ、長老がまず口をつける。これをザヘト (zalhel tov) ^[2] といい、その後ほかの人は食べることができる。ハニ族はクチャチャの間に殺した黄牛はその他のときに殺した牛より貴重なものだと考えている。これはおそらく彼らの祖先が遊牧生活をしていた名残であろう。

祭りの三日目、各家は客でいっぱいになる。村の外のブランコ場では人が海のようにいて、たいへん楽しい。近隣の村の若者たちが集まってきて、祭りの服装を着てあつまり、竹笛、三絃、四絃の音のなか、山道を出発して他の村の「ブランコのり」に行く。銀の飾りを着けて、音を鳴らしながら歩く。ブランコ場には熱狂的な雰囲気最高潮に達していて、ブランコに乗ったり、太鼓の舞い、扇子の舞い、笛、三絃、ドラなどが響いている。恋歌などが歌われとてもにぎやかである。

祭りの最後の日の午後、太陽が山に沈むころ、伝統の習慣にしたがって各家では九本の松を束

ねて松明を作り、家のなかの邪悪なものを払う。栗の木の根元の部分をくくって、村の外の道にたてる。栗の木が列をなしているところの下に松明を置く。それは祖先が帰ることを意味し、栗の木は馬を松明は照明を意味する。この日の午後、男たちは籠を持ってきて酒と肴を用意し、ブランコ場で宴を催し、クチャチャは終わる。

3 デイケディ (Dei keqdiq) : 田の祀り

デイとは平野のことで、ケディとは祭祀のこと、つまり田地を祀るということになる。毎年農曆五月の二度目の虎の日に一日間行なう。祭祀場所は田にいく道の途中である。供物は犬一匹と雌雄の鶏である。祭祀が終わると、犬の手足を折って、道に埋める。残りの部分は各家で一人ずつ呼んで、祭祀場所で祭主と一緒に共食する。

伝え聞くと、ある年ハニ族の梯田の稲が実ろうとするころ、青々とした苗が突然黄色く変色したことがあった。ハニ族はそれを田の神が起こしたものと思い、長老と司祭で一匹の犬と雌雄の鶏をもって行って田の道に行って祭祀をした。ほどなく黄色い苗は緑色になった。この年から、ハニ族は毎年五月の稲が実りはじめる頃、田の神を祀り、田の神にハニ族の苗を守ってくれるように祈るのである。

4 チャンパナパ (Qaq ba nal baq) : 魔を払う

チャンパナパとは病魔を払うという意味である。毎年農曆六月の最初の虎の日、全村で一羽の雄鶏を買って、村の病魔を払う。期間は一日間である。

言い伝えるところ、山の草木が緑になるころ、野外の病魔が村に入り、人々は病魔にあって病気になる。全村では誰も外に出ず、村の中でも誰も動かない。その後、白い鶏が羽を動かして啼き、村中の病魔を驚かして追い出してしまう。病魔が驚いたのち、村人は家々で碗を持ってきて、小さな鉄片と、糠を少々、果物等をいれて村外に送り出す。その後ハニ族の村にはそのような病魔はなくなった。そのため、ハニ族は農曆六月の最初の虎の日、全村で白い鶏を買って村中の病魔を駆逐するのである。それは病魔を払うという意味とともに、村民の健康をも意味する。

2 クトウトウ (Keeqtuvtuv) : 村門の祀り⁽²⁾

クとは犬のことで、トゥトゥは祭り、つまり犬を祀るということである。毎年農曆六月の二度目の猿の日に行い、期間は一日である。

昔はハニ族の村の村門は円形の木の塔のような形であった。いわゆる村門の祭りとは塔の木の腐った部分を新しくし、修理したのち一匹の犬を村門に捧げ、村門の横木に犬の足と尾を掛け、矢や鋸歯紋を付けるというものであった。

現在、塔状の村門はなくなっている。しかし、毎年村門を祀るその日には、元々塔が建っていたところに草の縄を張り、縄の上に同様の物品を付ける。これは村門の簡単になった形式である。犬の足や尾を掛ける目的は悪霊が村門に入らぬよう、村民の平安を村の神が守ってくれるように

するためである。

七 月

1 ミシク (Milsaol kul) : 村神を招く

ミシは地神あるいは村神のこと、クは招くという意味である。つまり、村神を招くという意味になる。ハニ族の村神は二種類あり、一つは村外れか村の西の端にあるプマアボであり、もう一つはミシである。伝え聞くところ、ミシは天神アボモミの女の子であり、父親から派遣されて、人間のところでいて村の老若男女の健康と安全を守っている。人々は農暦二月の羊の日に、全村で労働を停止して、村のなかの広場で山羊と雌雄の鶏を殺し、女神のために宴席を設け敬う。それが終わると全村では各家で人を派遣し、共食する。ハニ族の意識のなかではミシはたいへん美しい慈悲深い女神であり、彼女は全村の人々に幸福と平和をもたらすという。

八 月

1 チェシチェザ (Ceilsivq cevzavq) : 新米を食べる

チェシとは新米のことで、チェザとは選んで食べるということである。つまり、新米を食べることになる。毎年農暦七月か八月の犬の日か龍の日に、新米を食べる。ハニ族の村では各種の農作物が実っている。毎年このころになると、ハニ族はたいへん興味深い祭り、「新米祭り」を行なう。

「新米祭り」の朝、各家で自分の家の稲穂を根から引き抜いて持ってくる。この稲穂は適当に引き抜いてはならず、選んで抜いてこなければならぬ。また、必ず奇数で三本か五本である。これを引き抜いて持ち帰ったのち、いったん近くの井戸の近くか、菜園にそれを植える。これが「新米を持ちかえる」ということである。

この日、新米を持ちかえる人はその往復の途中で、誰から呼ばれても話をしてはいけない。これは話の途中で不吉な話がでてくるのを防ぐためである。そしてその日のうちに帰るのである。午後、一羽の雄鶏（去勢された）を殺し、人々はその年が雄鶏の羽根のように美しく、豊かであるように祈る。また、新米を食べる夕食のときには、その年にできた各種の野菜を賞味する。また、一碗の筍を食べ、筍は氣勢がみなぎることの象徴である。人々はその一年の穀物が筍のように一節一節伸びていくことを祈る。

各種の肴ができた後、持ってきた新米の稲穂を脱穀し、殻のついたまま油で揚げてあられをつくり、まず犬に一粒あげてから、家の者がそれぞれ数粒ずつ頂く。これについては次の話が伝わっている。たいへん昔、天変地異で世界が水没したとき、すべての作物が水に没した。大水が退いたのち、遠い天上から一羽の小鳥が、巨大な洞穴の近くに、金色に実った稲穂を見つけ、喜んで木の上からこの唯一の米粒を食べようとしていた。これを一匹の犬が見つけた、木の根元から数回吠えた。小鳥はびっくりして落ちて、犬は稲穂をくわえて家に戻ってきた。それで人間は稲穂を失わずにすんだ。そのため、新米を食べるときまずあられを犬にあげるようになった。あられ

を食べるときは何度かあられを摘んで、それが奇数であれば食べてよい。もし偶数ならばまた戻して、単数になるまでそれを繰り返すのである。

あられを食べたのち、正式に食事が始まる。一家はとても楽しく、歓談しながら一年の作物について話し、来年の幸せな生活を望むのである。

九 月

1 チェジロ (Ceijil lol) : 穀倉の祭祀

チェジは穀倉のこと、ロは祭祀の意味で、穀倉の祭りということになる。ハニ族は毎年九月、十月の最初の龍の日あるいは牛の日（または犬の日）に穀倉を祀る。ハニ族の伝統的観念には牛は田を耕し、馬は穀物を乗せて運ぶという言い方がある。その年にできたもち米をついて、餅をつくる。そのなかで神に捧げる小さな簸くらの大きさの餅を、主人は倉庫の穀物の山の頂点に供え、金色の穀物神を祀るのである。穀物神はハニ族に尽きることのない食糧を与えるのである。

十 月

1 チェラフシ (Ceilla huvqsiivq) : 十月年

チェラとは十月のことで、フシは新年、つまり十月に過ごす正月ということになる。又の名をザルトゥといい、大きな湯圓という意味である。毎年農曆十月の最初の龍の日に十月年を始め、漢族の春節のようににぎやかに六日間を過ごす。この時、ハニ族は一年の農事を終え、五穀、野菜もみな収穫され、鶏や豚が最も太った時期である。龍の日の朝、各家では門の外の庭で一羽の大きな赤い鶏を殺し、家族全員で食べる。この時の鶏は家のなかに持ち込んでではなく、別の家の者が食べてもいけない。これは血族を認識し、他の家族との区別することを表している。祭りの日には素朴なドラの音が鳴り響き、各家では鶏や豚を殺し、女は餅をつく。ついた餅で湯圓を作り、男は米酒や各種の肴を作るので忙しい。老若男女、祭りの正装を着て友達を訪ねる。男の子は草叢で相撲をとり、対歌を作る。

伝統の習慣に則って、嫁にいった女子は年にかかわらず、里に帰り祝いを申し述べなければならぬ。嫁側のリニジの各家に二つの餅と、よく煮た卵をあげる。ハニ族に幾多の嫁にいった娘が帰ってくる時の悲しいけれど美しい歌が伝わっている。祭りには最初の二日間の湯圓と酒、肴で祖先を祀る以外は、儀式はない。

ハニ族は客人が多いのをよしとする。祭りの時は家々で酒と肴で祝い、付近の異民族の友人たちを招き、共に味わい酒を酌み交わし、睦まじく過ごす。

2 フシニロロ (Huvqsiivq nee'lao lao) : 新年の祭り

フシとは新年であり、ロロは祭り、つまり新年を祭るということである。紅河のハニ族の間では「十月年」から新しい一年が始まる。新年の二回目の鼠の日に「新年の祭り」を開く。この日には家畜などは殺さない。村の老若男女は新しい一年を迎え、五穀豊穡、人畜興旺を祈る。

十一月

1 プマトウ (Puvma tul) : 村神の祭り

プマとは大きな村、トゥは祭りのことで、大きな村の神の祭りということになる。毎年農暦十一月の最初の虎の日に村単位で村神を祭る(村によっては猿の日または蛇の日でもよい)。村の神は新村を建設したときに、村の近辺の林から村神にふさわしい樹を神樹とし、その樹の上で村神を祭る。そのため、毎年この日がくると祭りを行なうのである。神樹の横には大きな石があり、村神を守っている。女性や家畜が入らぬように、神樹の周りには垣根が設けてあり、誰も勝手に神樹を切ったり、石を動かしたりしてはならない。祭典はまず、ミグと呼ばれる「祭主」を選び、ミグは泥棒などをしたことがない清廉で威信のある者で、子孫が多く、一夫一婦で結婚し、年高の、過去に何の懲罰も受けなかった者が選ばれる。村神に捧げられるのは一匹の豚、四羽の鶏(雌雄二羽ずつ)、一羽の雄の家鴨、茶、酒、おこわなどである。祭壇でミグは呪文を唱え、唱えおわると豚や鶏を殺し始め、それらの肉がよく煮えたころ、さらに呪文を唱える。それが終わるとミグは供物の一部を取り出し祭壇に置く。豚肉の三分の二を各家に分け与え、残りを各家の代表とミグで共食する。村神を祭る目的は、村神が村民の健康を守るよう祈るためである。

2 プマニロロ (Puvma nee'lao lao) : 村を祭る

プマは大きな村、ニロロは祭祀という意味で、村を祭るという意味である。ハニ族は新しい村を創った日を「ピマニ」と呼ぶ。村の記念日の祭りを村神を祭ったのち、一日間行なう。ハニ族の村の記念日の祭りの方法は各村で異なる。例えば、紅河県の楽育郷妥色村と然仁村では、この二つの村は十五分しか隔たっていないにもかかわらず、妥色村では虎の日、然仁村では蛇の日に祭る。これは、二つの村では村を創った日が違うためである。そのため、村を祭る日は異なり、この日には家畜は殺さない。村を祭る目的は、村神と土地神が村人を守り、災難なく人畜が栄えるようにということである。

十二月

1 ミソソ (Milsov sov) : 山崩れの神を防ぐ

ミは土地のこと、ソソは「崩れる」あるいは「水没する」という意味で、ミソソは山が崩れるということである。ハニ族は毎年農暦十二月の最初の馬の日、村で一匹の豚、二羽の鶏(雌雄)、野性のバナナの樹を一本を供えて山崩れの神に献ずる。山崩れの神は村外れの山の入口にある一本の樹であり、持ってきた供物をバナナの樹に入れて、その樹の下に埋める。祭りが終わると、残った供物は村の各家の代表とミグで共食する。残った肉は村に持って帰ってはならず、すべて穴を掘って埋める。山崩れの神を祭る目的は村人が山や川に行ったとき、山崩れや大水が出ないようにするためであり、それは村人の外出時の平安を意味する。

2 ハダ (Haldav) : 禍神を防ぐ

ハは禍いであり、ダは防ぐということ、つまり禍神を防ぐということになる。毎年農曆十二月の二度目の虎の日に行なう。村で二羽の白い鶏（雌雄）と一羽の雄の家鴨、一本の金竹を供える。まず、鶏と家鴨を殺し、竹を割って穴を開け、鶏と家鴨の羽毛と少量の肉を穴から入れ、ブランコに捧げる。残りは長老と司祭（ピマ）で共食する。祭りの目的は村の外から禍神が入らぬように、村人が村外で災難にあわないようにするためである。

以上のようにハニ族の年中儀礼は一月から六月、十月から十二月に最も集中している。一年間を合計すると二十九回の儀礼があることになる。一年間で少なくとも五十から六十日間を占めることになる。それはかなりの物財を消費する。また、伝統的な年中儀礼と原始宗教的な儀礼とは複雑に混じりあっており、分けることはできない。

稲村 務（筑波大学大学院歴史・人類学研究科）訳

[原註]

- 1 アボモミ：ハニ語で天神のひとつを表す。
- 2 ザヘト (Zalhel tov) : 供物を包むということ

筆者の調査中紅河県楽育郷妥色村の李賢斗氏にはたいへんお世話になった。この場を借りて感謝申し上げる。

[訳註]

- 1 紅河のハニ族の「十二支」は知られているかぎり、漢族と同じである。西双版纳以西のアカ系統のハニ族では龍がなく、かわりにラバが入っているが、訳者はこれについて論じたことがある [稲村 F. C.]。
- 2 アカ系のハニ族は過去に村門を創らなかった時期があり、紅河のハニ族の村門とはその意味が異なっている。訳者はアカ系統のハニ族の村門について論じたことがある [稲村 1992, 1995]。

稲村務

1992 「ハニ族の村門—西双版纳ハニ族の階層とリニジの動態」

『比較民俗研究』5 筑波大学比較民俗研究会 pp. 175-186。

F. C. 1 「北タイアカ族の時間意識」『族』27号 筑波大学民族学研究室。

1995 「比較民俗学と文化人類学における「比較」概念点描

—「アカ種族」社会における村門の意味」

『比較民俗研究』12号 筑波大学比較民俗研究会。